

貝塚確認調査の現状と課題

—主として県内主要貝塚調査の成果から—

上守秀明・西野雅人

目 次

1. はじめに	493
2. 事業について	493
3. 本事業との出会いとかかわり	494
4. 各年度の調査について	494
5. 6遺跡の成果と問題点	511
(1) 調査と報告の方法	511
(2) なにを明らかにするか	514
6. 本事業の目的と意義	516
7. 問題点と今後の課題	517
(1) 県内貝塚の保存と活用を考える	517
(2) あいまいにされてきた方針と計画	517
(3) どのような遺跡を対象とするか	518
(4) 物理探査による貝層・遺構の分布調査	518
(5) 本事業以外の状況	518
8. まとめ	519

1. はじめに

もともと重要なのはわかりきっていて、破壊の危険もなさそうな遺跡をなぜ、いま調査する必要があるのか？

これは今回取り上げる「県内主要貝塚調査」事業の計画を知ったときに抱いた疑問である。この事業に積極的な意義を見つけることができなかつた筆者らは、疑いをもったまま調査を担当した。しかし、その結果として、はじめの疑問に対する自分たちなりの答えを見いだすことができた。そして、調査の方法や方針などもある程度毎年受け継がれていくようになっている。果たしてそれが有効なものであったかどうかを検討することをこの論文の課題としたい。

論文の骨格部分は、下の4章に分けて説明した。

4. 各年度の調査について
5. 6遺跡の成果と問題点
6. 本事業の目的と意義
7. 問題点と今後の課題

このうち、4. については今後の調査のときに参考になるように、個々の調査の内容をとても細かく扱ったので、論文全体の目的からはずれた部分が多くなっている。そこで、飛ばして読んでもよいように、5. に総括を用意した。

2. 事業について

「県内主要貝塚調査」は千葉県教育委員会（以下、県教委とする）が事業主体となり、当センターが実施している調査である。これは当センターが県教委より委託された重要遺跡確認調査の一つで、この他に古墳・窯業遺跡・古代寺院・中近世城館跡を対象とした調査があり、毎年4事業ほどを組み合わせて実施している。「県内主要貝塚調査事業」は昭和63年度から平成4年度に5か年計画で下記の貝塚について実施された。その後、平成5年度より継続して新たな5か年計画が企画され、今年はその2年目を迎えようとしている。

事業内容は県教委が国庫補助金を受けて史跡指定以外の重要と考えられる貝塚を対象に調査を行うものである。発掘を行う場合は調査実施面積が200㎡に達することが義務づけられるほかには文化庁からの指示はなく、どのような内容の調査を行うかについては各県教委に委ねられているという⁽¹⁾。千葉県の場合、分布調査を経て主要貝塚の今後の保護活用をはかるため、測量と発掘調査を行うことを基本方針としたようである。調査は一般的に農閑期の10月あるいは11

月の1か月間、引き続き整理作業は2か月が当てられている。

これまでの6年で実施した調査は以下の通りである。

当初の5か年計画		
(1) 銚子市余山貝塚	昭和63年度	(太田文雄)
(2) 横芝町山武姥山貝塚	平成元年度	(淳一)
(3) 千葉市誉田高田貝塚	平成2年度	(出口雅人)
(4) 小見川町白井大宮台貝塚	平成3年度	(四柳 隆)
(5) 袖ヶ浦市山野貝塚	平成4年度	(上守秀明)
第二次5か年計画		
(6) 野田市東金野井貝塚	平成5年度	(安井健一)

3. 本事業との出会い・かかわり

筆者の2人はかなり以前から縄文時代の貝塚に興味をもっていた。しかし、本事業についての最初の印象ははじめに書いたようであったこと、さらに補助金事業という限られた期間や予算でなにができるか疑問であったことから、方針の明らかでない現状では担当者にはなりたくないと考えていた。対象は県内でもきわめて重要で著名な貝塚であり、調査してみたいという気持ちより、重圧の方が強かったのである。

ところが2人はそれぞれ1回づつ調査を担当することになった。そして実際に調査に入ってみると、消極的ながらこの事業の意義を実感することができた。報告をまとめてみると「なにが重要なのか」さえも以外とわかっていないことにも気づいた。そして、この数年間に他の調査にも関わっていくなかで、この事業に積極的な意義を認めるようになったのである。おぼろげながら、しかも主観的なものとはいえ、調査の方針も見えてきたように思う。

4. 各年度の調査について

ここでは各遺跡の調査の内要を紹介して、成果と問題点を抽出してみたい。たいへん冗長で個別的なので、とくに必要な方以外はここを飛ばして「5. 6遺跡の成果と問題点」を読んでもらいたい。ただし、貝塚の調査事体に興味のある方は是非この部分を読んで調査の方法や何を調査するかという点についてご指導をお願いしたい。

なお、トレンチ名の略称その他は各報告書に従った。紙面の都合もあって、本稿だけで内容を把握できるようにまとめることはできなかった。報告書と見比べなければわかりにくくなってしまった点を容赦していただきたい。

この文章は身内の者の覚え書きの体裁をとったが、二人が担当した調査以外は担当者とする程度見方の異なる部分もある。誉田高田貝塚は西野（旧姓出口）が、山野貝塚は上守が調査を担当し、白井大宮台貝塚と東金野井貝塚は現地と整理作業に立ち会っている。しかし、余山貝塚・山武姥山貝塚は調査に立ち会っていない。

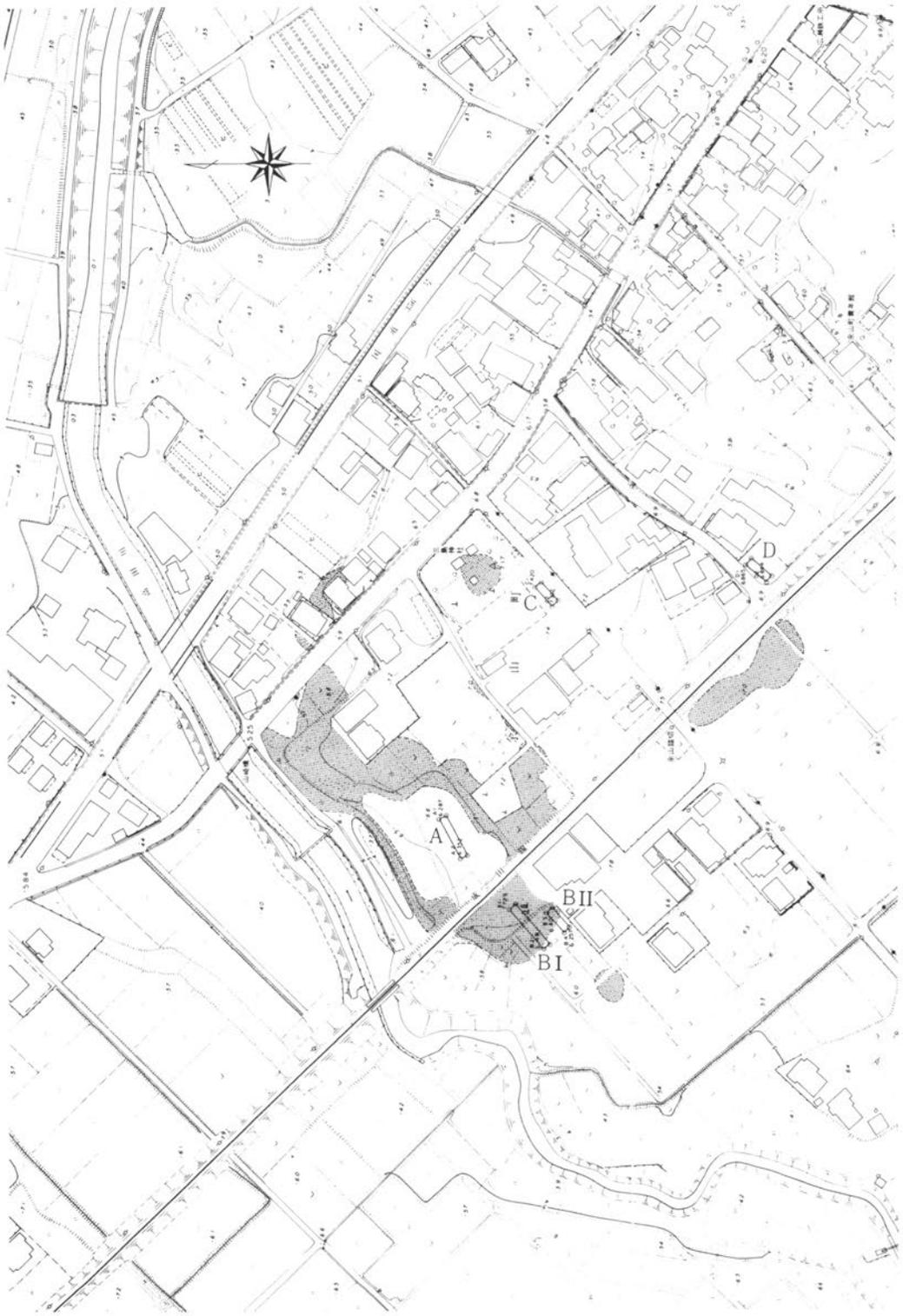
（1）余山貝塚

過去の成果の活用 「まとめ」で過去の調査や遺物収集について述べている。そのなかで今回の調査と過去の成果との関連性について触れている。また、明治42年に高嶋唯峰氏によって公表された明治期乱掘によるトレンチの位置や、人骨の出土位置の概念図を改めて提示した。

トレンチの設定 5か年計画の初年度ということで「今後の保護活用に資することを目的とし、貝塚の規模・性格、分布状況等の不明な部分を明らかにする」という調査方針を明言している。こうした意図のもとに5本のトレンチを設定した。Aトレンチは主要貝層の遺存状況把握のため、そのほぼ中央部に設定、B I・B IIトレンチは高まりをもって露呈している主要貝層南西端部の分布範囲や層厚、遺構の有無の確認のため設定した。Cトレンチは北東部に所在する小範囲の貝層に隣接した地点に、Dトレンチは主要貝層から南東に120mほど離れた地点に、それぞれ遺跡の広がりを確認するために設けた。結果的にはやや遺存不良ではあったものの当初の目的をどうにか果たしたのは、B I・B IIトレンチの2本のみであった。Aトレンチの状況から判断すると、昭和34年に土取りされた主要貝層の遺存状況はほぼ壊滅的と予想された。下草刈が、実施できなかったため⁽²⁾、表面観察が困難であったとしても、調査が不必要と判断のついた時点でトレンチ全掘は避けるべきだった。この問題については後述するが、事前に調査対象を限定していたことや、その状況の中で200㎡という調査面積をクリアしなければという制約があったことが、応用範囲の幅を狭めた原因であろう。Cトレンチでは歴史時代の遺構の検出のみ、Dトレンチでは遺物1点の出土のみと、遺跡の広がりを把握するには資料不足であったことから、事態の変化に対応できる準備があったらよかったと思われた。

遺構の調査 B I・B IIトレンチで遺物包含層下に検出された土坑、19基を掘り下げた。中には覆土中にブロック状の貝層が堆積するものがある。特筆すべきはB Iトレンチの土坑群から出土している縦長の砥石で、従来から知られている多量に出土する貝輪の製作用具の可能性を述べている。

遺跡の範囲 遺物の散布範囲については、概括的に記載がある。これによれば遺跡の位置す



第1図 余山貝塚測量図 1/2,500
太田1988付図に加筆縮小した。

る砂丘に全体に広い散布が認められるようで、周囲の河川沿いにも認められる。昭和62年に実施された遺跡西側にある高田川の河川改修に伴う調査によって、かなり低位面まで遺構が分布することが確認されている。しかし貝層分布の途切れる遺跡南西部（貝層開口部？）をはじめ、トレンチ確認が全体に散っていないため不明瞭な部分を多く残し、まだまだ未確定といえよう。

遺跡の時期 今回の調査のほかに、古くから著名な貝塚であったための乱掘による出土や、昭和34年の削平に伴う遺物採集などから、加曾利B式～荒海式の時期に形成されたと思われる。主要貝層はその南側が後期中葉、中央部は後期中葉～晩期前半、北側が後期末葉～晩期前半をそれぞれ主体とすると推測しているが、その根拠となる記録に決定要素が弱く、未確定と言わざるをえない。一方、BIトレンチや高田川河川改修の調査成果から、貝層外縁や低位面に晩期の遺構や遺物が認められ、貝塚形成以後も遺跡が存続していたことがわかった。

貝層の分布 地形図に貝層の分布範囲が入っているが、どのような調査によって測量したものか記載がないことから、ボーリングを実施したかどうか不明である。散布範囲なのか貝層の堆積範囲なのかを示す必要があった。「貝塚の規模・性格、分布状況等の不明な部分を明らかにする」という当初の目的からすれば、配慮がやや欠けていたと思われる。

遺構の分布 既述したように貝層外縁や低位面の晩期の遺構の存在は確認できたが、貝層部やその内側の分布については把握できていない。貝層部については、主要貝層の遺存状態から今後に出される可能性は極めてやすく、既述の高嶋氏の報文から考えると、中央部外縁に墓域が存在していたのではという程度である。居住域などの場の機能の解明は、未知の貝層内側や周辺部に可能性が残されている。

動物遺存体の内容 多量の出土が認められている。貝類は至近に棲息した汽水～淡水性のものは少なく、チョウセンハマグリが約75%をはじめ、外洋性のものが主体的となる。同定できた骨の約70%以上は魚骨で、外洋性の回遊魚や鹹水性のものがほとんどであるが、未同定の小魚の個体数も多いことから、汽水～淡水性のものもその中に見込まれる可能性を残している。獣骨ではクジラなどの海獣類が目立つようだが、シカ・イノシシを主体とする陸獣は今回のサンプルではさほど多くないようである。

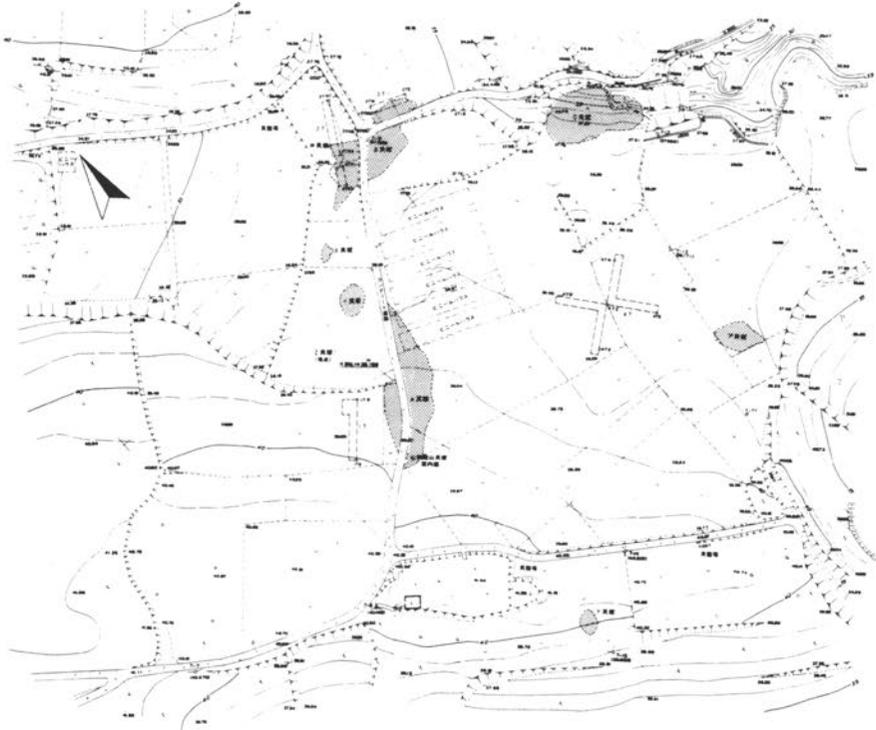
山武姥山貝塚以降に実施したサンプルの採取～分析・報告までの基本形がまだなかったことや、これを一貫して見ていただいた小宮氏が、余山貝塚の時点では積極的に関わっていなかった点を考慮すると、今後他と同じく追加報告をしていく体制の整備が必要と考える。その上で生業活動の一側面が明らかにされよう。

遺跡の特色 ①外洋に比較的至近に位置し、しかも後期中葉以降に周辺が淡水化していく砂丘上にある本貝塚の、漁場などを含む資源の選択性が注目される。②漁撈活動にとどまらず、多量の貝輪や玉類と、その加工具？である砥石の出土など、この遺跡は生産遺跡としての可能

性を含んでいる。

今後解明すべき点 ①上記のような遺跡の特色を有す可能性があるものの、晩期の土坑以外、特に居住を示す遺構の分布は不明である。貝層内側などに存在する可能性を追求したい。②今回のサンプルに限らず、過去の多量の出土品を整備し、できる限り遺跡を復元することも大事であろう。

(2) 山武姥山貝塚



第2図 山武姥山貝塚測量図 1/2,000

筈1989付図のトーンを濃くして縮小した。

過去の成果の活用 調査歴やこれまでに明らかになっている遺跡の内容について総括してある。また、調査の目的やトレンチの設定位置の検討に、それを活かしている。ただし、調査地点の呼び方などがわかりにくい点について整理し直す必要があったのではないだろうか⁽³⁾。

トレンチの設定 「調査の及んでいないところの調査を行おうという意図のもとに」設定した。1 TはZ地点の晩期包含層の南のつづきに設定した。2 T・3 Tは発掘例のないB地点(=W地点)の貝層の広がりを探った。4 Tは地点貝塚群の内側に設定した。1 T・2 T・3 Tが目的をある程度達成できたのに対し、4 Tは、遺構確認が困難な状況であった⁽⁴⁾。「地点貝塚の

環の中の遺構の有無」は是非知りたかったところであり、調査面積の半分を4 Tに費やしてしまったのは、結果的にもったいなかったように思う。4 Tと斜面貝層の中間あたりの遺構の有無を知りたいところである。

遺構の調査 1 Tで検出した2軒の住居跡をトレンチ部分について全掘した。また、同トレンチの晩期包含層はトレンチの一部だけを掘り下げた。住居跡は底まで掘り下げたのだから、形態について記載すべきであった⁶⁾。

遺跡の範囲 遺物の散布が密な範囲について記載がある。ただし、位置の表現がわかりにくい。散布状況の調査の成果を図示する必要があったのではないだろうか。

遺跡の時期 調査以前に中期阿玉台期～晩期後半の各時期の貝層をもつことがわかっていた。今回の調査では前期・黒浜期のものとみられる貝層が新たに発見された。また、前期末から中期初頭の土器も見つかっている。

貝層の分布 ボーリングによって貝層があたったところと貝の散布のみのところを区別せずに図示していて、実際残っている範囲がわからない。今回は検出できなかったとしている貝層(X・Y貝層)も同じように地形図に示してある点も問題である。ボーリング調査によって今回確認した確かな成果がわかるように示すべきであろう。

遺構の分布 過去の調査も含めて性格のわかる遺構は、1 Tで検出した住居跡の2軒だけである。今のところ廃棄の場以外は明らかになっていない。今後、どのあたりに住居跡があったのか追求したい。とはいえ、晩期後半の住居跡の検出例は県内でもきわめて少なく、発見自体が特筆される。

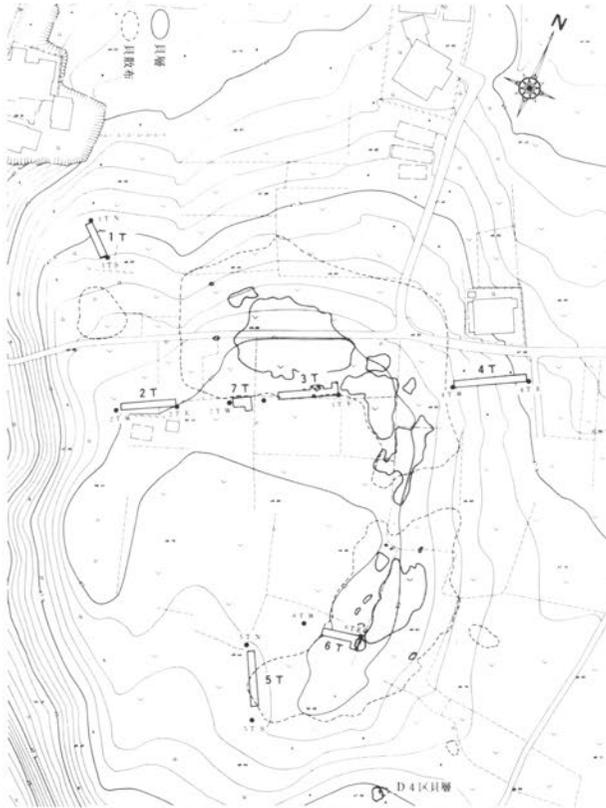
動物遺存体の内容 当遺跡は、Z地点の調査によって晩期の層から獣骨がきわめて多量に出土したことで、全国的に知られていた。今回の発掘では、2 Tで採取したサンプルから新たに多くの注目すべき知見が得られた。分析は報告書作成後も継続して行われ、昨年度に発表されている(小宮1993)。それによると、淡水～汽水産の魚骨が多量に検出されており、貝類は外洋産の種が主体である。魚と貝では漁場が違っていたことになる。また、周辺の貝塚のコラムサンプルの成果を合わせて考えると、当貝塚周辺の縄文人の漁撈活動は、縄文中期から晩期にかけて大きな変化がないこともわかった。

遺跡の特色 ①晩期包含層の獣骨のおびただしい量の出土。②晩期の貝層をもつこと。貝塚王国といわれる県内でも晩期の貝層が確認されている例は少ない。③黒浜・阿玉台・加曾利E・堀之内・加曾利B・後期安行・晩期と前期から晩期にいたる生業の変化を追うことができる。時期がわかる貝層がこれだけそろった貝塚は他に例がないのではないか。

今後解明すべき点 ①今のところほとんどわかっていないといえる、遺構の分布状態。②前期から晩期に及ぶ各時期の貝層からサンプルを採取して生業の変化を知ること。③慶応大学の

発掘品を整理して内容を知ること。これは新たに調査する以上に大事であろう。

(3) 誉田高田貝塚



第3図 誉田高田貝塚測量図 1/2,000
出口1990付図を縮小した。

過去の成果の活用 過去の成果（学習院高等科史学部1954）も合わせて考察を行っている。ただし、以前調査を担当した岡田茂弘氏からお話をうかがうことになっていた⁽⁶⁾にもかかわらず、果たせなかった。せっかくの好意を無にしてしまい、たいへん申し訳ないことをしてしまった。

トレンチの設定 遺跡の大部分は畑であり、調査期間中は大部分が耕作中であったため、トレンチ設定が可能な範囲はごく狭かった。縁辺部の斜面に設定した1T・2Tは遺跡あるいは包含層の範囲の把握を目的とした。2T・5T・6Tは馬蹄形の貝層の延長上の貝のない部分について、遺構の有無を調査した。3Tは馬蹄形の貝層の内側に設定した。本来は中央付近に設定したかったが、

耕作中のためできなかった。なお、7Tは調査中に人骨片が散乱していたため、カクラン坑から人骨を回収する目的で設定した。1Tは結果としてボーリングで済む成果しか得られず時間の無駄になった。

遺物の回収 発掘した縄文時代の層の体積は僅かなものだったので、縄文後期の調査としては遺物の量は極めて少ない。3Tの住居の覆土は4mmのふるいをかけたが、7T人骨群では時間がなくて実施できなかった。小さな骨はかなり取りこぼした可能性がある。

遺構の調査 台地上には包含層はなく、住居跡の覆土も失われたものが多いようであった。2Tと6Tではトレンチ全体にピット群を検出した。これを住居跡群と考えて良いかどうかを、また、できれば時期も知りたいと考えて多くのピット群で覆土を半分掘り下げて断面図の記録を行った。3Tでは人骨と住居跡を調査している。7T人骨群はショウガ穴のカクランによっ

て掘り出された人骨片の回収を目的としていたにもかかわらず、最終的にはトレンチ部分を全掘した。

スケジュール 表土がきわめて浅く、10~20cmも下げるとハードローム面で遺構を確認できたので、掘り下げに要したのはわずか2日程度だった。そのため、ボーリングと表面採集に時間をかけた。しかし、3 Tの合葬人骨と7 Tの人骨群を調査したのは無理があった。当時は様々な状況を考えて判断して、できる限り丁寧に調査したつもりだが、資料の重要性からみると場所や状態を確認した時点で止めるべきであったと思う。もちろん整理作業の日程にも無理が出て多くの人に迷惑をかけてしまった。

遺跡の範囲 広い範囲で綿密に表面採集を実施した。それによって遺物の分布がほとんど見られなくなる限界をほぼ確認した。しかし、報告書では表面採集の成果を時期的な分布の傾向としてしか使用せず、集落の範囲については述べなかった。1回だけの表面採集で「分布しない」と決めるのは危険なので慎重を期したものである。今思えば集落研究に向けた情報として掲載するべきであったかもしれない。

遺跡の時期 調査前に知られていた後期前葉から後期末葉に加えて、晩期前半の資料を得ている。細かい分布調査とトレンチ出土遺構および遺物から、主な活動の場所の時期的な変化を想定した。

貝層の分布 かなり時間をかけて行った結果、小さなブロック貝層もみつかった。ボーリングを実施した範囲とともに、逆に行えなかった範囲もわかるように示す必要があった。なお、台地西側には貝層がないことを確認した。

遺構の分布 2 T・6 Tと3 Tの東半に住居跡が著しく重複していることがうかがえた。学習院高等科の調査と合わせて考えると、貝層下と貝層より内側に住居跡が集中してつくられたとみられる。7 T付近は住居跡の空白部であり、集団埋葬墓を検出した。墓域が決まっていた可能性がある。

動物遺存体の内容 当遺跡の貝種組成をはじめて数量化した。その結果、都川流域貝塚群の最も谷奥の貝塚であるにもかかわらず、下流の貝塚と同様であることが明らかになった。一方、魚骨はフナなどの淡水魚を多数検出しており、断片的なデータながら、魚採りと貝採りの漁場が異なっている可能性がある。ただし、動物骨の分析は未了である。

遺跡の特色 都川貝塚群という貝塚の研究史的にも今後の研究上も最も重要視される遺跡群の中で、一番谷奥の貝塚であることが古くから注目されている。今回の調査では、淡水魚が多数検出されて谷奥貝塚の特色の一端が明らかになった。報告書では都川流域の貝塚の分布図を使って当時の海域に出るためには、少なくとも6.3km以上谷を下ったことや、周辺の貝塚との位置関係を示した。

今後解明すべき点 7Tの人骨群はごく簡単な分析をただけであり、専門的な形質学的分析を行う必要がある。最近の研究でこのような事例が縄文社会の本質にせまり得る重要な遺構であることがわかってきた（渡辺1991、1994）。くわしい分析を行う機会をなんとか作りたい。

(4) 白井大宮台貝塚



第4図 白井大宮台貝塚測量図 1/2,000

四柳1991付図を縮小、記号を追加した。

過去の成果の活用 研究史的に明治時代という古い段階から小調査が何回か行われており、これらを概括的には示している。このなかで、昭和20年代後半の西村正衛氏の調査(西村1951、1955)が重要だが、その成果や問題点が報告に活かしきれていない。また、斉木勝氏の大宮台貝塚(A地点)の報文にふれていない。

貝層の名称については、これまでの経緯に触れた上で新たにA～Dの4地点の呼称をつけている。以前の名称は不適当と考えられる⁽⁷⁾ので、今回正確な計量図とともに名称をつけたことの意義は大きいと思われる。ただし、測量図には地点名称を示すのを忘れてしまった。今回は第4図に示した。

トレンチの設定 全部で9本のトレンチが設定されている。各斜面貝層の平坦部からの状況を考慮したもの(1T・8T・9T)、斜面貝層の状況の把握に努めたもの(2T~4T)、平坦部の貝散布の性格の把握を目的にしたもの(5T~7T)に分けられる。調査例のないA地点貝層に重点をおいて4本のトレンチ(1T~4T)を入れた結果、西村氏の調査で主体となっていた時期よりも新しい加曾利E式期の内容を伺うことができた。その一方で、耕作中の箇所が多かったこともあって、過去にも調査の手薄だった台地上に設定したトレンチが少なくなってしまった。

遺構の調査と遺物の回収 今回確認できた遺構は7Tで検出したSK-01とSK-02の2基の土坑であった。SK-01は完掘し、SK-02は幼児骨を検出した時点までを記録して埋め戻した。後述のように、両遺構とも覆土中には発掘中にすぐ目につくほど骨が入っていた。掘り下げ自体に要したのがほんの数日であったことからすれば、回収率は低いと考えなければならない。得られた情報はすばらしいけれども、失われたもの大きさを考えると掘り下げは別の機会に委ねるべきであったろう。

スケジュール 調査期間が10月1か月間である中で、その前半はほとんど秋の長雨にたたられ、スケジュールを圧迫した。しかし、こうした状況の中で遺構を調査したため、整理作業にも影響を及ぼし、多くの人の協力を仰いでしまった。また、ボーリング探査や遺構分布の把握などの精度も落とすことになった。

遺跡の範囲 斜面貝層の堆積範囲の確認と集落の構造の解明に主眼をおいていたため、遺跡の範囲を明らかにするための調査は実施しなかった。

遺跡の時期 従来の知見は前期の少量の出土以外は五領ケ台~阿玉台が主体、次いで加曾利E式となっていた。今回は早期の沈線文、条痕文(特に鶴ヶ島台式)、加曾利E期での曾利系土器、加曾利E末葉の追加が行われた。特に鶴ヶ島台式、加曾利E式末葉のものは比較的内容が充実しているため、従来の中期前半を主体とする時期ものに追加する形で、何らかの遺構の存在を予想させる。

貝層の分布 西村氏の調査の分布範囲と大略では変わらない。僅かに平坦面で3か所の遺構内貝層をボーリング探査で発見し、小竪穴内の貝層を2か所発掘によって検出している。ボーリング探査を綿密に実施する時間がなかったため、遺構内貝層は将来新しく確認されるものが多いかもしれない。ボーリングの実施範囲、表土が厚くて調査できなかった範囲などを示すべきであった。

遺構の分布 確認した縄文遺構は2基の土坑に限られる⁽⁶⁾。県内の縄文中期の拠点的な集落では、ほぼ例外なく台地上に多数の遺構を検出している。このことからすれば、今回の結果は以外であった。原因を考えてみると、一つはトレンチの位置が遺構群から離れていた可能性である。台地上に入れたトレンチをみると、すべて貝層のある向斜面(谷気味の斜面)にかかって

おり、皆同じように斜面の肩の部分である。もう一つはセクション図から、遺構の掘り込まれた層が失われた部分も多いようであることである。

いずれにせよ、この時期の土坑群や住居跡群のあり方を念頭に置いていれば、もしはずれたとしても、もっと台地の内側や平坦部にトレンチを設定していたはずである。黒部川低地貝塚群⁽⁹⁾と近くの小野川流域貝塚群⁽¹⁰⁾には中期の貝塚が集中している。これらの貝塚は立地や貝層の形成位置が共通しており、多方向から谷の入るところに立地して、その谷頭（向斜面）に貝を廃棄している⁽¹¹⁾。ところが、どの遺跡でも斜面貝層を中心に小発掘が行われたこともあって住居跡を1軒も検出しておらず⁽¹²⁾、東京湾方面の中期の拠点集落のようにいわゆる「環状集落」を形成しているかどうかは興味深い問題である。

動物遺存体の内容 発掘したSK-01とSK-02をはじめとして、貴重な成果が多く得られた。中期の貝塚は貝ばかり多いというイメージとはおよそかけ離れたものであった。

SK-01では床面にヒトとイヌの埋葬、覆土中にイノシシの幼獣の埋葬⁽¹³⁾がみられた。覆土中では別個体のイノシシ幼獣骨を確認しており、さらに報告後には中央ピットの覆土上層にほぼ全身そろった幼獣骨がさらに1体分入っていたこともわかった。なお、動物骨の分析は未了である。

貝類は西村の成果を追従するものであったが、組成を数量化したのは今回がはじめてである。6 Tでは発掘中に二枚貝のうちの6割強が殻がしまっていたことを観察している。あまり例がないのではないか。

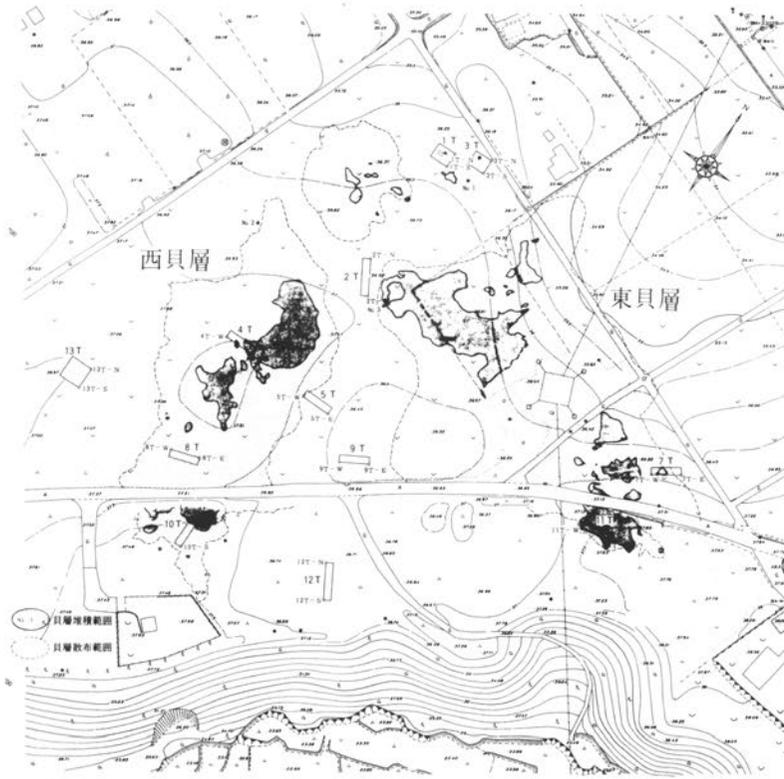
遺跡の特色 ①黒部川流域の貝塚群を代表する遺跡であり、学史的にも名高いこと⁽¹⁴⁾。②同貝塚群のなかでも最大の貝層をもつこと。これは西村の調査で確認されたことで、最大厚4 m以上の斜面貝層をもつという。これは県内でもあまり例がないであろう。③動物遺存体が質量ともに中期としてはきわめて豊富であること。④斜面下の泥炭質の縄文包含層の存在が期待できること。⑤SK-01で検出したヒト・イヌ・イノシシの埋葬例。

③～⑤は今回の調査で明らかになった。これによって当遺跡の魅力がさらに付け加えられた。

今後解明すべき点 ①遺構の分布から集落の構造を知ること。②A地点の貝層下に検出された(2T)有機質の包含層(5層の下)の内容を調べること。分解の進んだ泥炭のように見えたので、縄文期の泥炭層が存在する可能性がある⁽¹⁵⁾。

問題点 調査中に周辺の台地で土取りが行われていた。遺跡の範囲は台地の下にまで及んでいると考えられるので、手遅れにならないうちに限界の確定を検討することが望まれる。

(5) 山野貝塚



第5図 山野貝塚測量図 1/2,000

上守1992付図を縮小、文字を追加した。

トレンチの設定 1T～5T, 7T～13Tの11本を設定した。これらはその位置での地形と遺構の有無の把握に努めたのは言うまでもないが、1973年の調査を念頭においたものである。すなわち、①貝層の分布については、ボーリング探査が行われていたため、それを参考に未確定の区域に設定した(2T, 8T, 10T～12T)。②1973年分布範囲に加え、つまり今回のボーリング探査で検出された貝層の範囲や性格の把握のため設定した(1T～4T, 7T)。③1973年の調査は面状貝層の東貝層のほぼ中央部の約900m²が対象であったため、貝サンプルの情報が限定されている。そのため、東貝層1カ所(11T)以外で、西貝層に2カ所、サンプル採取のため設定した(4T, 10T)。

遺物の回収 遺構内貝層を含め貝層内については4mmのふるいかけ⁽¹⁶⁾を行った。これは発掘のみでは見落としてしまう小さな骨などを回収することを目的とした。あくまでもサンプルデータの内容とは、別に評価を加えるべきものである。

遺構の調査 3Tで堀之内期の住居跡を発掘した。柄鏡形住居の存在によって、当遺跡の研

究的な魅力を1つ増やしたとはいえ、遺構確認で柄鏡形住居跡の存在の可能性をつかんだことで、すでに十分な成果であったかもしれない。

スケジュール 発掘期間の約2/3は長雨にたたられたが、条件整備をしたうえでその中でもできるもの（ボーリング探査など）を優先して行い、やや遅れ気味であった程度だった。当センターの協力体制が得られたため、耕作面とのぎりぎりの境界で検出した、上記の遺構調査はすべきと判断してしまったため、結果的にはこの発掘によって整理作業のスケジュールにまで大きな圧迫を与えた。遺構内貝層のサンプルを取りたいと思ったのも、発掘にむかってしまった一因であった。何よりも誉田高田貝塚・白井大宮台貝塚での反省点を活かし、もっと慎重を期すべきというバランス感覚が必要だった。

遺跡の時期 1973年の調査では遺物は後期堀之内1式～晩期前浦式の出土があり、貝層は後期堀之内1式～安行2式のもの判明していた。今回は土器については称名寺II式が追加された。貝層の時期については、今回新たに検出した遺構内貝層は堀之内I式を中心とすると思われるが、全体的には前回調査の範囲にとどまっている。ただし、トレンチ・遺構毎の遺物量の数量的提示がされていないため、遺物の各場所での主なものの内容提示にとどまり、各時期の分布傾向が把握しにくい。現在わかっている範囲では、貝層の形成は堀之内1式～安行2式である。

貝層の分布 誉田高田貝塚でとった方法をさらに改良した形でボーリング探査を実施した。探査によって明らかになった推積範囲と、表面観察によった散布範囲を図示した以外に、探査を実施した範囲も図示した。これは、道や畑の境界など、今でも現地に行けば凡そ把握することのできるものを指標とした。しかしながら1973年調査の貝層範囲は既に失われていたため、現地で記録化できなかった。その調査時に記録した原図を取り寄せたが、重ねるにはやや精度などに難点があったため、結局は示さなかった。例えば概念的な範囲であっても、図化する方法を変え（スクリーントーンの種類を変えるなど）、測量図に重ねるべきであったか？。しかしながら、従来確定していなかった貝層の南限を確定し、20か所以上の遺構内貝層を新たに検出できた。

遺構の分布 1973年の調査ではほとんど不明であったが、今回はかなり精緻なボーリング探査を行ったことで、遺構内貝層を有するものを主体に堀之内1式を中心とした居住域を把握できた。その分布をみると、面状貝層の範囲と居住域がそれほど相関していないことを示唆している。今後は「明示できた調査区域」外側の範囲限界を把握する必要があるだろう。

遺物包含層については、晩期を主体として面状貝層内側の凹地形に形成された可能性が高い。他は、1973年に一部調査された東貝層外側の境川水系の支谷に通ずる緩斜面の堀之内1式～安行2式の包含層について、今回はトレンチを設定できなかった。

動物遺存体の内容 金子氏らによって「東京湾の奥部—現千葉市～市川市に至る沿岸—と湾口域との中間の様相をよく示すことが指摘されている（金子他1973）。1973年の報告書から動物依存体についてみると、貝・魚とも内湾種が主体で、外洋種が混じっている。貝層中に含む鳥獣骨の量も以北の内湾性の貝塚より多いという（金子1983）。今回持ち込んだサンプルは決して多くはないが、検出資料の分析が終われば比較可能なデータを得ることができるので楽しみである。

遺跡の特色 ①大型貝塚が集中する東京湾東岸の貝塚地帯のなかで、大きな貝層をもつものとしてはもっとも南に位置すること。②動物骨がとても豊富なこと。全国的な視野で貝塚研究をしている金子氏をして「この貝塚が我が国の縄文貝塚でも最重要のものの一つであることが明らかになった」といわしめる（金子1973）内容をもっている。③後期堀之内式の柄鏡形住居のある程度为数検出が予想されること。④晩期土器中には東北地方、関西地方との交流を示すものがあることから、この遺跡の交易圏の広さは注目できよう。

今後解明したい点 ①拠点的な集落である山野貝塚と隣接する伊丹山遺跡、角山遺跡との関係、すなわち遺跡群としての在り方を解明すること。②今後、動物遺存体の分析が進めば、この貝塚が立地する東京湾東岸の湾奥部と湾口部の貝塚の中間地帯の様相を具体的に示すことが可能なこと。③柄鏡形住居の集落内での意味を捉えること。④平面形が馬蹄形や相弧状を呈する貝層の成因について、従来の視点のように集落形態との相関性で考えるだけでなく、立地環境による制約も考慮してみる必要性を提出したが、妥当性については類例の増加が待たれること。以上の4点をあげることができよう。

問題点 ①今回の貝サンプルデータは量的に不充分であったため、1973年の調査で採取し、十分に提示できなかったサンプルデータについて、分析作業が望まれる（現在は袖ヶ浦市博物館に収蔵）。②「動物遺存体の内容」で述べた東京湾内湾地域と湾口部地域の中間的な様相を示す貝塚は、ほとんど破壊されてしまった。もっと広く見て県南部全体でも現存する貝塚は少ないので、とくに保存に関して万全を期する必要がある。

調査の公開 山野貝塚では、昭和47年に千葉県都市公社によって約900㎡が調査されていたため、その内容を整理し今回の調査の目的と併せて「山野貝塚のはなし」（発掘調査編）という小冊子を発行した。内容はできるだけ平易になるように努め、研究者を含む見学者や地元の方々に配布し、公開につとめてみた。限られた期間でこのような余裕は余りないかもしれないが、準備期間中にある程度の内容については用意できるし、自分にとっては調べてそれを簡潔にまとめていたことが、その後、報告書をまとめていくうえで、たいへん有益なものとなったというプラスアルファも生んだ。また単に公開するというだけでなく、地域住民をはじめとする一般の方々に保存を訴える場合でも、遺跡報告書以外の平易な内容のものを必要としよう。山

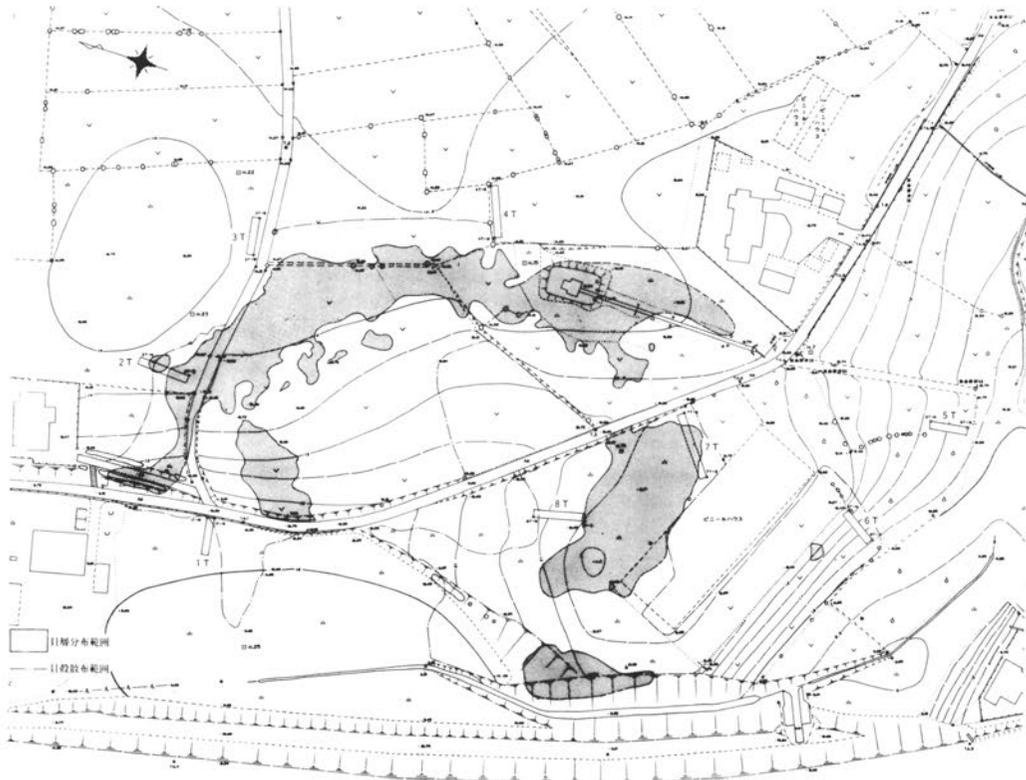
野貝塚ではそうした意味で「山野貝塚のはなし」（整理作業編）を出す予定でいたが、怠慢のため出しえなかった。

地主、地域住民への呼びかけ 余山貝塚の場合、地元教育委員会の協力によってほぼ希望する位置にトレンチを設定することができたが、山野貝塚の場合はほとんど当初の希望位置について内諾を得ることができなかった。そこで、県教委・市教委・当センターの各担当者で再度調整した上で、市教委担当者の協力を得て地主に個別直接交渉を行うこととなった。そうしたことで承諾をいただいた場合もあったが、さらに難航した場合もあり、「そんなにたいへんな貝塚なら、耕作もしづらいので、市や県で買い上げてほしい。それならいくらでも協力しますよ」といわれたことがあった。結局、数度訪ねて貝塚のはなしをわかりやすく伝えていくうちに承諾いただきトレンチを設定することができた。当センターで通常の受託事業だけ担当しているうちだけでは経験することのないケースであり、改めて地主や地元の協力を得ることの意味についていろいろと考えさせられた。たとえどのような性格の調査でも事業者や地元の理解のもとに行うことが、埋蔵文化財の公共性を還元していくことにつながるという意味で重要であると。日々、忙しさに流されていく中で、骨惜しみせず普及活動は続けていくべきで、それは日々行うことのできる最小単位の内容でも充分であることが認識できた。山野貝塚の地主さんの場合、最後には農作業の手を休めて家族で見学に来ていただいたという、うれしい結果につながった。もし今後、この貝塚で保護・活用をはかろうとするとき、今回のこの行動が協力を求めるための下地になればよいと思ったわけである。

（6）東金野井貝塚

過去の成果の活用 ごく最近に野田市によって3度調査されており、そのうちの一度は共通する目的で行われた確認調査であった。必要なデータが調査前はかなり得られていたのである。しかし、調査や報告でそれを活かすことができなかった。

トレンチの設定 馬蹄形貝層の近くに入れたトレンチ（2T・3T・4T・7T・8T）では、中期から晩期の包含層、遺構を検出した。とても豊富な情報が得られた。一方、1T・6Tでは縄文時代の層が存在せず、トレンチを入れる必要がなかったと考えられる。また、5Tでは攪乱層の下から泥炭質の層を検出した。この層が縄文期の遺物を含んでいるかどうかは今回確認できなかった。やや心残りなのは、貝層の周囲にトレンチを多く設定している一方で、中央の向斜面（谷）には手をつけなかったことである。あとで触れるように、この遺跡を（あるいは馬蹄形貝塚一般を）考える上で「なぜこの谷を囲む場所を集落の場所として選んだのか」の解明はとても興味深いテーマではないだろうか。野田市の調査も含めて、この地点に全く手をつけていないのは残念である。



第6図 東金野井貝塚測量図 1/2,000
安井1993付図を縮小した。

遺物の回収 8 Tでは獣骨が多数出土したが、フルイは使用しなかったため回収率は低いと思われる。

遺構の調査 2 T・3 T・7 T・8 Tで住居跡を検出した。原則として遺構検出にとどめたが、必要に応じて一部にサブトレンチを入れている。

スケジュール 無理のないものであった。

遺跡の範囲 この点については解明する意図がなかったようである。3 T・4 Tでは、多量の遺物が出土しており、貝層の東側に集落が続いていることは確かである。逆に南側斜面の5 T・6 Tや北斜面下の1 Tでは縄文期の層にあたらなかったため、ほとんど情報が得られなかった。保存を考えていく上で、限界に関する情報は重要であるが、今回は前進しなかった。

遺跡の時期 遺跡の時期は過去の調査の裏付けるものであったが、加曾利E式の住居跡を複数検出したことで、拠点的な集落の造営時期が確実に中期にさかのぼることがわかった意義は大きい。

貝層の分布範囲 正確な地形測量図を作成することは本事業の主要な成果の一つである。こ

の数年、正確なボーリング調査の方法の検討とその有効性を強調してきた。今回はボーリングが「充分に行えた」とはいえず「過去の野田市の成果等を参考に推定復元」してしまったことにより、あいまいな部分を残している。山野貝塚ではボーリング調査の実施できた範囲を図示していたのを考えると、やや配慮に欠けていたといえる。確実な成果を積み重ねていけるように心がけるべきであろう。表面の貝散布も今後の調査の目安となるので示すべきであった。

遺構の分布 馬蹄形貝層の内外の貝層に近い部分に、加曾利Eから晩期の住居跡が多いことが認められた。さらに、遺構と遺物のあり方から「中期の活動の中心が北側にあること」、晩期の活動域は「遺跡の南半分にかたよっている」こと（安井1993、46P）を指摘した⁽¹⁷⁾。本事業のようなトレンチ調査による成果としては、かなり具体的になってきたといえよう。

遺跡の特色 ①前期から晩期におよぶ遺構・包含層をもつこと。②包含層が厚く、各時期の層や遺構が良い状態でバックされていること。土器の層位発掘やテフラの分析によって、今後層位に年代が与えられる期待もできる。③攪乱が少なくおそらく県内でも有数の残りの良い貝塚であること。④包含層は西側の低地内に連続する可能性があり、泥炭層の存在が予想できること。これらの特色について報告では強調されていないが、住民にその重要性を訴える上でも、また研究上でも非常に魅力的な遺跡である。

動物遺存体の内容 今のところ後期以外の貝層を検出していないが、晩期については今回貝層のない包含層からも骨の出土が見られたことから、研究対象になり得る。晩期の生産活動は獣骨の集中や稲作の開始の可能性などくに注目を集めているところであり、当遺跡は奥東京湾地域での実態を知る上できわめて重要である。今回の調査では目につくものを取り上げたもので、回収率はきわめて低かったと考えられる。今後土壌サンプリングや掘り上げた土をフルイにかけるなどの精度の高い調査が望まれる。

問題点 ①図示した土器の個々の事実記載に多くのページを費やしているにもかかわらず、地点ごとの出土傾向を示さなかったこと。また、図示した土器が一部になってしまったとしても、全体の点数などを報告するべきであったと考える。②今回の調査で得られたデータは、この数年の当事業のなかでも充実したものであったと思われる。しかし、これまでの成果や今回の調査の目的や意義、また残された課題などが整理されなかったことによって、遺跡の構造や保存に向けての展望を明確にするといったことに活かされていない。③周辺の遺跡の内容や地形の特徴などをまとめておかないと、その遺跡の特色や明らかにすべき点などが浮かび上がってこない。

今後解明すべき点 ①地表面の散布や今回採取したサンプルから貝種組成の異なる貝層があるらしい。どのような変化をたどったかは解明したい点である。②厚い包含層に阻まれてボーリング・ステッキが届かない場所があった。その範囲について明らかにしておく必要がある。

③遺跡の範囲に関する情報がない、限界確認についてはこれからという状況である。④江戸川沿いの低地内に包含層が続いて泥炭層を形成しているかどうか。泥炭遺跡であるかどうかは、保存の必要性を考える上で、また保存区域の線引きをする上で重要なので今後是非確認したい。⑤遺跡の微地形をみると、江戸川の低地に直面した谷状の地形（向斜面）をめぐる台地上（およびその延長上）に貝層が形成されている。これは「中央広場で共同作業を行った」というイメージでは説明がつかない。今後、谷状地形の形成過程や包含層の有無について知りたいところである。

5. 6 遺跡の成果と問題点

ここで前節で述べた6遺跡の調査・整理の方法や内容を総括して、評価してみたい。

(1) 調査と報告の方法

事前の準備

最小限の破壊で大きな成果を期待するためには、過去の調査の成果や周囲の遺跡の内容などをよく検討して、調査の目的などを明確にしておく努力が大切である。調査前に過去の成果をまとめて、課題を明らかにしておくことによって改善できる点が大きいであろう。あまり下調べもしないうちにトレンチ位置の設定をしてしまうケースも多い。よくないとわかってはいても毎年準備不足をくり返してしまっている。この論文をまとめてみて、その想いを強くした。出土遺物の事実報告は後から補足することができるが、調査はやり直せないからである。当事業に関わった者は手伝いも含めるとすでに10名以上になっている。準備期間は、きわめて短いので、今後協力体制をつくって、事前に調査の目的や課題を明らかにする段階で情報や意見を交換しておくようにしたい。

トレンチの設定

トレンチの設定は初年度から一貫して200㎡となっている。位置を決めるのは土地の借り上げの準備などもあるので5月ごろである。したがって、発掘中に各トレンチの状況を考慮して地点を変えていくことには制限がある。しかし、1地点に15～20mといった長いトレンチを入れる必要性はうすい場合が多く、一部に入れて必要に応じて拡張するような方法は必要であろう。とくに攪乱や厚い表土で縄文期の層を調査できないことがわかった場合（東金野井貝塚の1T）や、包含層や遺構が失われていると考えられる場合（同5T・6Tや普田高田貝塚の1Tなど）は、別の地点にふり返るべきである。

遺物の回収

残念ながら、ごく一部を除いて貝層や骨の包含層にフルイをかけるといった微小な遺物の回

収の努力⁽¹⁶⁾はほとんどなされていない。破壊を前提としないのに、かえって我々が通常緊急発掘で実施している方法よりも精度が低い。また、掘り出した土器のごく一部しか報告できていない現状がある。もちろん、今後報告を追加していくつもりである。しかし、整理期間を考えて、また、精度も決して高くはないことから、あまり多くの遺物を掘り出さないようにつとめることも考慮するべきかもしれない。過去の例で多量の遺物を掘り出したケースをみると、遺構を掘り下げた場合と包含層を掘り下げた場合の2種類に分けられる。この問題は次の項で取りあげよう。

遺構・包含層・貝層の調査

遺構・包含層・貝層の「有無」を確認すれば良いのであれば、表土を剥がして平面的に精査するだけで事足りる場合が多い。ここまでは、ほとんど非破壊に近い。しかし遺構かどうか、あるいは包含層かどうかあやしい場合は掘り下げる必要がある。掘り下げをはじめた遺物がたくさん出るようであれば、その遺物によってある程度情報を得られるであろうから、そこで掘り下げを止めればよい。—ここまでは、おそらく本事業に当然求められる調査といえよう。

検討課題になっている一つは、遺構・包含層・貝層の内容を知るための調査まで行うかどうかであり、もう一つは包含層がある場合にその下の遺構確認のために包含層を掘り下げるかどうかである。

遺構の形態とか遺物の内容を知ろうとすれば、それだけでかなりの時間をとってしまう。その意味で、本論では菅田高田貝塚の人骨集積、白井大宮台貝塚の小竪穴、山野貝塚の竪穴住居跡は遺構の確認にとどめるべきであったと判断した。しかし、掘り込みや土器の出土を確認しただけで遺構の種類や時期がわからないのでは中途半端であり、やはりある程度縄文時代の層の掘り下げが必要な場合も多い。どこまで明らかにするかはどうしても個々のケースによって判断することになる。ここでは判断の際の原則を確認しておこう。

本事業では、公共座標にのった測量図をはじめとしたまとまった成果のない遺跡が選ばれたケースが多い。その場合、期間や予算を考えると個々の遺跡や包含層のくわしい内容を調査することを中心にすることはできない。遺構は時期と種類（住居跡・土坑など）を、包含層は時期と密度を確認する段階で良しとするべきではないだろうか。作業は、主に平面的な遺構確認を中心として、①若干平面的に掘り下げる ②サブトレンチを入れる ③ピンポールなどで深さや平坦面の有無を調べるといったことを補足的に行う程度にする。包含層のあつた場合には、その下の遺構の有無を確認したいところだが、ある程度精度の粗い調査になることを考慮した上で掘り下げるかどうか判断したい。

これまでの調査をみると遺構の上に良好な包含層がある場合も多く、なんとか遺構確認を行おうとすると確認面まで下げる間に多量の遺物を掘り出してしまう。「包含層」としてとらえて

いるものであっても、本来遺構があるのに認識が難しいケースも多いと考えられる。したがって、本事業のような短期間では慎重な遺構確認を行う余裕はないので、良好な包含層を確認・記録した時点で掘り下げを中止するべきであろう。必要に応じて壁際にサブトレンチを入れるなど、掘りすぎに留意したい。少なくとも、単にその下の遺構を確認する目的だけで包含層を取り除くというのは考えものである。

破壊を前提としていない以上、対象となる遺構や包含層の調査に求められるべき精度を保てないなら掘り下げを避けるというのが原則といえる。

貝サンプルの分析

当初は貝層を掘り下げてしまってよいかどうか疑問をもっていた。しかし、これまで見てきたように、ごく一部を掘り下げて貝層の内容を知る意義は大きい。確かにあつかうのはごく一部のデータであり、遺跡全体やある時期・遺構などを代表する成果は得られないが、見通しを立てることで今後の研究方法を検討できる。実際に山武姥山貝塚や誉田高田貝塚では単に食生活について知るだけでなく、生業や社会関係について有効な仮説を提示している。

現状をみれば、大規模に貝層調査を行った遺跡でも必ずしも比較に耐えられるだけのデータを提示できていたとは限らない。むしろ、ごく一部のデータを使って予想をたてるにとどまっているケースが多い。これでは小発掘の成果と変わらない。また、貝塚が最も多い千葉県内でも貝サンプルのデータは驚くほど少ない⁽¹⁸⁾。

分析の成果をうまく活かすことができれば、本事業で実施しているような貝サンプル採取に伴う破壊は相対的に小さく、採取を行う意義は大きいといえるのではないか。

スケジュール

1か月の調査というのは本当に「あっ」という間である。良い成果を得るためには限られた時間を効率的に配分しなければならない。その際に、「何をどこまで明らかにすべきか」、「どこを諦めるか」などについて、調査中も関係者に相談してすすめると良いであろう。今までの経験では、調査担当者は張り切るあまり盲目的になりやすい。

調査の公開

調査の日程や目的などを貝塚研究者などに知らせる必要があると思われる。これまでにある程度呼びかけたのは山野貝塚の調査のみである。対象となる遺跡は、いずれも多くの研究者が注目していると考えられるので、今後努力したい点である。

地主、地域住民への呼びかけ

調査担当者が決定するのは実施期間の半年前である4月段階、内部打ち合わせを経て現地踏査を行うのは5月になってからである。この成果をもとにトレンチ設定希望位置を決め、県教委の調整担当者に提出する。その後、県教委担当者が該当市町村教育委員会に地主との下交渉

を依頼し、内諾が得られた場合、トレンチ位置が決定していくのである。その際、交渉がスムーズに進む場合はあまり問題はないが、難しい場合は位置の変更など再度の調整が必要となる。

資料の提示方法

保存を前提とした遺跡の調査の成果は、データが断片的なので個々の成果に終わりがちである。今後の調査のために、成果を書き加えていけるようにしておくことが大事である。そのためにできることは、一つには、なるべく成果を図上に示して位置をはっきりさせておくことである。さらに、今後追加していく断片的な成果が混乱しないように、地点や区域、地形などの名称を整理しておくことも望まれよう。もう一つは調査で直接確認した成果と、報告書や他人から得たそれ以外の成果を混在させないことである。たとえば山野貝塚のボーリングの成果の提示方法はこの点を配慮したものである。

この二つの点を分かりやすく示すために考えなければいけないことは、地点をどのような名称で呼ぶかである。

過去の調査地点や貝層の呼称の仕方に、混乱や不適切な点がある場合が多い。今後研究をすすめる上で、公共座標にのった測量図を作成した機会に、それらを整理しておくことは大きな意義をもつであろう。

周辺も含めた地形をわかりやすく示して、斜面・台地・低地・谷などの呼び方を整理しておくといよい。ほかに公共座標を使ったグリッド設定も有効であろう。表面採集の成果や地権者などからの聞き取りの成果は、測量図に示した畑の区画が有効であろう。

報告に間に合わない成果について

出土した遺物のうちのかなりの部分が報告されていない。報告に間に合わないほど掘り出さないようにすることも考えられるが、保存される遺跡の内容を知る貴重な機会であるから、それに限定されなくても良いのではないだろうか（ただし、報告後にも分析をすすめて、改めて公表する責任を負えるかどうかの確認が必要であろう）。とくに、動物遺存体の分析はどんな報告書でも報告で終わりではなく、そこが分析の出発点であるといえる。したがって、無理して雑な分析を行うよりも、報告書に間に合う部分だけを計画的に処理して、それ以外は大づかみな傾向や見通しのみを掲載する方法をとっている。貝サンプルや手掘りで取り上げた獣骨・魚骨については、すでに追加報告を終えた山武姥山貝塚以降、調査・整理の担当者と千葉県立中央博物館小宮孟氏が報告後に分析をすすめている。人工遺物では各年度に大量の土器を掘り出している。これについては、むしろどこまで報告するかの問題なので、「遺物の回収」の項でとりあげた。これらの資料の公表についても必ず補完していきたい。

(2) なにを明らかにするか

次に、この事業の確認調査でなにを明らかにするべきかについて考えてみたい。当然遺跡によって違って来るものであるが、限られた時間のなかでなにを優先するか、なにを切るかといったことはとても重要なことであろう。

立地・地形

かなり正確な地形測量を実施するので、微地形について考える良い機会になる。また、立地条件は遺跡の性格を考えたり、周辺遺跡群の中での位置づけを行う上で大きな情報となるので、是非まとめておきたい。ただし、測量の精度には疑問がある（山武姥山貝塚を担当した蔀氏から指摘を受けた）。貝層の範囲以外の測量は業者に任せっきりであり、微妙な地形が表現されているかなど、現地で確認する必要があるかもしれない。

時期

出土する土器の時期の範囲や集落の継続時期などについて、これまでに新たな知見が多くの遺跡で得られた。しかし、これは別地点を調査するたびに付け加えられていく可能性が高いことを示している。畑になっている遺跡では詳細な表面採集の実施によってある程度補うことができるが、より下層の（したがって古い時期）ものは表面に出にくいという傾向がある。

遺構の分布

200㎡のトレンチ発掘の成果のみから遺構配置などについて論じるのは無理である。しかし、分布がある程度明らかになっているかどうかは、今後調査を行うときにはより具体的な目的をもった調査が可能となるであろう。誉田高田貝塚では、表面採集の結果と併せて遺構分布の時期的な変化に言及した。このような仮説をたてておくことによって、それを検証するためにはどこにトレンチを設定すれば良いが、といったより具体的な調査のテーマを設定することができる。ただし、保存を前提とした遺跡でよりくわしく遺構配置やその分布域の限界を確認するには、トレンチ発掘を増やす以外の方法も考える必要があるだろう。これについては、次章で物理探査による方法について述べる。

遺構・包含層・貝層の内容

既に述べたように、内容を知ろうとした調査については、今回「掘らなくても良かったのではないか」という評価をした。しかし、基礎的な調査を実施済みの遺跡で、この点について追求する目的の調査を実施することも意義があるだろう。

動物遺存体の内容

県内の各水系ごとに貝塚の様相や動物依存体の出土傾向などについては、すでに金子の優れた研究成果（金子1983他）があるので活用するべきであろう。その上で、貝サンプルの分析によって比較可能なデータを提示しておくことは、「小さな破壊で大きな成果を」という意図からしてもとても意義があると考えた。

遺跡の特色 この項目で取り上げたのは保存を考える上で住民などに訴えるような「特色」や、今後重要な研究に活かせるような「特色」である。それを見い出せるかどうかは、今後の保存・活用に関わると考えた。報告書では特に注目すべき点を強調することも必要であろう。

6. 本事業の目的と意義

最初にことわっておいたように、我々は本事業の目的をはっきり確認しないままに調査・報告を積み重ねてきた。前節までに紹介してきた調査の方針も、その積み重ねの結果である。だからここでまとめてみる本事業の目的や意義も、必ずしも事業を計画した当初のものとは違っているかもしれない。この際、むしろどのぐらいずれているのか、考え方は適切なのかどうかをはっきりしてよいであろう。

目的と意義 最初に「重要」なのはわかっていると書いた。しかし、それは案外漠然と遺物がたくさん出るとか規模が大きいといったことであることが多い。遺跡の内容についてよくわかっていないのでは、保存の必要性を理解してもらうにあたって説得力がない。周辺の遺跡の内容が開発がすすむとともに明らかにされていくなかで、保存された「重要」な遺跡の方の内容が比較検討できないとしたら、何が「重要」なのかわからなくなってしまう。たった1回の確認調査で明らかにできることはごく限られている。その後に研究をすすめるための土台づくりが事業の目的といえよう。まとめると、おおよそ次の2点になる。

①何が重要なのかを分かりやすく示すこと

②今後どのような研究（活用）がのぞめるかという見通しを示すこと。

一方で、保存区域を設定する目的は、このような調査では達成できない。また、貝層だけの分布範囲は保存の区域の決定の材料にはならない。

調査の有効性 重要遺跡の性格から、最小限の掘り下げで最大の情報を得ることが望まれると書いた。この点でも、貝塚ほど表面観察のボーリングやごく一部の発掘によって豊かな情報を引き出しうる遺跡は少ないであろう。したがって、今後も非破壊または最小限の破壊による全県下の貝塚の調査は大きな成果を生むと考えられる。ただ保存をして（内容を確認しないで）すべてを後世にゆだねるのは誤りではないか。実際に保存されている遺跡の多くは畑であり、思わぬ破壊がおこっている⁽¹⁹⁾。

その上、貝塚の調査はむずかしい。そして、時間がかかる。方法について書いたものはかなりあるが、実際の発掘では予算・期間などによる制約が多く、なかなか十分な調査に結びつかない。時間や費用による制限から失われる情報の量が他の遺跡と比べても大きい。また、すぐ

れた研究がされても、だいたい莫大な情報のうちのごく一部の例を示すにとどまっている。だから、その貝塚で何を解明すべきかという視点をしぼる必要性が大きい。限られた時間・予算のなかで何を行えばよいか、という視点がないといつまでたっても状況は変わらないであろう。

本事業は多数の貝塚を対象としており、それぞれの貝塚でどのような研究ができるかという個性の面の比較と、それとは逆に広い視野での比較研究の両面から「何を研究するか」、「何を調査すべきか」を求める場所を提供し得るであろう。

7. 問題点と今後の課題

(1) 県内貝塚の保存と活用を考える

本事業は県内各地の貝塚を対象としているので、個々の遺跡の保存を考えるというほかに、県内の貝塚をどう保存・活用していくかという広いテーマに取り組む材料となりうる。「理屈抜きに、どの遺跡も等しく貴重で学術的にも大切であると主張するだけで、世間が納得するという時代は終わった」（岡村1993）のである。貝塚もすべて重要だといっただけではいられない。「どのように」「どのくらい」重要なかを比較検討するための材料が必要である。本事業はもとよりこういった目的で実施していると思うので、今後は①調査の成果を保護活用のためにどのように使うのか、②残された年度でどのような遺跡を対象とするべきか、の2点を明らかにしておくことが望まれよう。現在は、この点があいまいなまま（少なくとも調査担当者が知らないまま）事業が進行しているのである。

(2) あいまいにされてきた方針と計画

当初我々がこの事業に対して悲観的なイメージを持ったのは、このように方針がはっきりしないからであった。実は事業の始まる前に、5か年を通しての基本方針を決めておく必要があることを話し合ったことがある。たとえば、調査すべき基本事項の設定などがあげられていた。調査担当者にとってあいまいで困っているのは、「何を調べるか」である。今後の保護・活用のためといった目的はあるものの、調査の結果を保護活用のためにどのように使うのかがよくわかっていない。調査する事項はそれによって変わってくるであろう。実際にこれまでに調査した6遺跡について、その後保存や活用に向けた動きは全くないようである。

また、調査・報告を終えた貝塚について、保護活用の方策が具体化したときに対処できるように、報告に間に合わない部分の整理や報告後に明らかになった課題などを追究するための計画も必要ではないだろうか。

(3) どのような遺跡を対象とするか

事業は現在2回目の5か年計画の2年目に当たる。今年度(平成6年度)は流山市上新宿貝塚の調査が決まっている。遺跡の選定について言及する立場ではないが、あえていくつかの視点だけあげておきたい。一つは、重要性が高いことのほかに、開発の危険性が高い遺跡を選ぶべきではないかということである。もう一つは、時期や地域があまり偏らないようにすることである。

(4) 物理探査による貝層・遺構の分布調査

遺跡保存範囲を決める根拠となるのは、通常遺構や包含層の分布状況である。ところが貝塚の場合、発掘しなくても地上の観察やボーリングによって貝層の範囲がわかる点で有利にみえる。しかし、こと遺跡(または集落)範囲を推定する上ではマイナスに作用しやすい。つまり、貝層分布範囲だけを保存することになる例があることである⁽²⁰⁾。最近の成果によって、(馬蹄形などの)貝層の外側にも住居跡が存在することは、むしろ一般的といえる。つまり、本事業で実施している方法では、遺構の広がりや分布状況についてはごく断片的な成果しか得られない。したがって、このような調査の成果だけで保存範囲や整備計画を決めることはできない。より広い範囲をカバーする方法が必要である。

この問題点を解決する方法としては、物理探査による方法がある。千葉市・加曽利貝塚の「南貝塚」の調査では「地下レーダー」法が試みられている(後藤1990)。筆者はその方法についての知識がないので、ここでその有効性について述べることはできない。この方法を採用するかどうかを考えてみると、精度と予算が気にかかるところであるが、精度については後藤氏が、加曽利貝塚の例を詳しく紹介している。それによると、レーダー探査による遺構の有無の予測が試掘の結果と合っていた率はおおよそ8~9割であり、測定時の条件によっては的中率の更なる向上も考えられるという。しかし、もし精度に若干の心配があることを考慮しても、この調査法はとても有効なものと考えられる。つまり、「不完全ながら遺構の分布状態を全体的に捉えること」が、「将来の考古学的調査・研究のためきわめて貴重な指針となる」(後藤1990、28P)からである。とくに史跡整備を行うときには、断片的な調査成果を根拠にして決定的な整備を行うことを避けなければいけない。これも後藤氏が指摘するとおりであろう⁽²¹⁾。

少なくとも本事業で採用しているトレンチ発掘とボーリングだけでは、後藤氏の指摘するところをクリアすることはできない。

(5) 本事業以外の状況

県内には昭和58年現在、国指定史跡の貝塚が10か所、県指定8か所、市町村指定10か所が史跡

として保存されている(千葉県文化財保護協会1983、169P)。また、指定されていなくても何らかのかたちで現況保存が図られている貝塚も少なくない。すでに、史跡整備を行って遺跡の活用を実践しているところもあるので、県内だけでも「貝塚をどう保存・活用していくか」という問題の検討材料は豊富である。そろそろ方法や現状、問題点などについて県全体といった広い視野で検討してみる時期ではないだろうか。

それでは他の都道府県における保護活用を前提とした国庫補助金を受けた貝塚調査の状況はどうであろうか。

史跡指定のものとそれ以外のものの両者があり、前者には発掘調査もその内容に含んだ形での史跡整備がある。これには一般的なものと、「ふるさと歴史の広場構想」に基づくものがある(埼玉県富士見市水子貝塚、茨城県土浦市上高津貝塚など)。後者については本県と同様に詳細分布調査が行われているもの(福島県、熊本県など)、記録保存の内容を含む確認調査の行われるもの(北海道虻田郡虻田町高砂貝塚、岩手県宮古市崎山貝塚・二戸郡二ツ森貝塚・大船渡市大洞貝塚、富山県氷見市朝日貝塚など)が挙げられる。これらがどのような目的・方針で調査を行ったものなのか、我々の今後の活動に活かすよう参考にしていく所存であるが、これらについては現在進行中のものが多く、成果の公表が期待される。

8. まとめ

- ①本事業は一定の成果をあげているといえるだろうが、成果をどのように活用するのかを考え、事業の目的を明らかにしておく必要がある。
- ②それをはっきりさせた上で、調査の方法について再検討したい。
- ③保存・活用のために今後何をすればよいかを検討する事が必要である。

保存を考える上で、遺跡の価値の判断は調査担当者や教育委員会の職員などの特定の個人に委ねるべきものではない。本事業のようなとくに重要な遺跡については、調査の方法や方向性についてまで多くの研究者の考えを聞く姿勢が必要であろう。

将来保存や整備を計画することになった場合、国・県・市町村の文化財担当者や地権者をはじめとする周辺の住民、市民などが話し合う場を設けることになるだろう。そのときには過去にその貝塚の調査・研究に携わったものも加えてもらえないだろうか。きっと、話し合いのなかでその貝塚を保存する意義や、活用の可能性について説明することができるであろう。

また、新しい事業などの調査を計画する段階でも、実際に担当する側の意見を反映していただけないだろうか。そうした場がないと、目的を同じくするもののなかで立場によって考えが

分断されてしまう危険性が高い。そうになっているとしたら、不幸ではないか。

ここまで目的がわからないままに、尋ねようともせずあいまいな考えのまま事業に関わってきたことを反省したい。これからは顔をそむけないように努めたいと思う。自分自身の仕事に対して正直であるために…。

最後になったが、事業にかかわる機会を与えてくれた千葉県教育委員会および当センターの関係者に感謝したい。また、岡村道雄文化庁技官には本県以外の状況についてご教示を得た。

あるいは分を越えた意見もあったかと思われるが、なんとかこの事業をより意義のあるものにしたと思う故のことであり、ご容赦願いたい。また、当センター資料課には整理後の遺物の保管などについていつもお世話になっている。みな貴重な資料であり、出土遺物の管理は今後とも厳密に行っていきたい。

註

- (1) 県によっては詳細分布調査を行っている場合もあり、千葉県でも昭和55～57年度に実施して「千葉県所在貝塚詳細分布調査報告書」（千葉県教育委員会1983）として公開されている。なお、文献にあげた千葉県文化財保護協会1983『千葉県の貝塚』は同一内容である。
- (2) これまでに下草刈を実施できたのは山野貝塚の調査に限られる。このときには他の重要遺跡調査とトータルの予算であったため、伐採費を融通できた。
- (3) 過去の調査で呼称に統一性がないときは、今後どのように呼べば良いか考えるべきであろう。今回は新発見の貝層に「ア地点」「イ地点」とさらに別の方式の名称をつけているが、このようなことを繰り返すととても複雑になってしまう。小規模な貝層は今後も増加する可能性が高く、1ヶ所ごとに地点名称をつけるのには無理があるのかもしれない。ある貝層を指すのにいつまでも「○○大学の○地点」などと呼ぶのは煩わしい。地形測量を実施した機会に将来を考慮した名称を検討してはどうか。
- (4) 2A・2B層は、縄文後期・晩期の土器は各時期が混じっており瓦も混じることから後世の層の可能性が高い。したがって、報告書(42P)で「4Tのあたりは」「集落跡は無いと思われる」という推論するのは早急であろう。東関東の大型貝塚の例を見ると、後期後半以降は貝層のない中央付近にも遺構がある(むしろ多い)傾向があるので、地点を変えて調査するまで結論は持ち越すべきであろう。
- (5) 床や壁の検出状況などである。報告書を見ると、①1T-Bは床に傾斜があること、および②切っているはずの包含層(2A層)との土器の新旧関係が怪しいこと、によって住居跡かどうか疑問が残る。1Tの遺構外出土土器の層位を示すべきであった。1T-Aも含めて、晩期の住居跡は検出例が少なく、「住居跡であるかどうか」自体を慎重に検討する必要がある。
- (6) 1954年の調査報告書をお借りすることができた。
- (7) すなわち、西村氏(西村1951・1955・1984)の「白井大宮台貝塚」「白井通路貝塚」「白井雷貝塚」であり、小見川町教育委員会(小見川町教育委員会1980)の「白井大宮台貝塚A地点」「同B地点」「同C地点」という名称である。次の2点により不適當である。①前者では貝層ごとに1つの遺跡名をつけていたこと。また、使用

した字名も混乱していること（四柳1991、48P）。②後者では貝層は4か所の谷に向かって堆積しているにもかかわらず、名称は3つであったこと。

- (8) 5 Tは全体が攪乱されていたため検出できなかったが、遺物の量から付近に遺構があるらしいと推定している。9 Tでは時期不明の土坑1基を検出した。時期も性格も不明なこの土坑こそ、SK-01・SK-02よりも掘り下げてみる必然性があったであろう。
- (9) 当貝塚・阿玉台貝塚のほかに、中期の木ノ内明神貝塚・向油田貝塚・内野貝塚があり、後期では良文貝塚がある。
- (10) 中期では三郎作貝塚・下小野貝塚・返田-弥宣録貝塚・金田貝塚がある。後期では台畑貝塚がある。
- (11) このような貝層のあり方は、例えば千葉市にある中期の有吉南貝塚や後期の木戸作貝塚などにも見られる。
- (12) この貝塚群における西村氏の調査はすべて貝層部分であるために遺構が検出されなかったと考えられる。
- (13) 西野は報告後に断面のカラー写真から遺体より一回り大きい掘り込みを伴うらしいことを確かめた。
- (14) 同貝塚群には国定史跡の阿玉台貝塚と良文貝塚がある。学史的な重要性は同じ中期貝塚では阿玉台貝塚に軍配が上がるが、遺跡の内容からは今のところ白井大宮台貝塚の方により魅力を感じる。近くの小野川流域貝塚群も含めると、県指定史跡の佐原市下小野貝塚や市町村指定の佐原市三郎作貝塚、台畑貝塚、山田町向油田貝塚がある。貝塚史跡指定はとても多い地域といえよう。白井大宮台貝塚の重要性からすれば、なぜか指定から漏れた恰好である。
- (15) この層の上面あたりで、調査を終了している。報告書に記したように（四柳1991、8 P）土器の包含量は4層以下で少なくなるものの、泥炭のような土が多くなる5層下面以下に少なくともまだ土器が入っていた。
- (16) 古くから行われていた発掘中に目にした遺物を取り上げる方法では1 cm以下の微細な遺物の回収率はきわめて低い（小宮・鈴木1979）。その対策として岡村氏は堆積物をすべて持ち帰って水洗分離を行う方法（悉皆サンプリング）を紹介している（岡村1987）が、期間や予算を考えると実施が不可能な場合が多い。そこで、我々は千葉市有吉北貝塚の調査以降サンプルとして持ち帰れない貝層などの堆積物を捨てる前に現地では約4 mmの園芸用フルイを使って遺物の回収に努めている。
- (17) 晩期の遺構・遺物は野田市の第3地点（野田市郷土博物館1981）でも集中しているので、晩期の活動域が南半分にかたよっているとは言いきれない。
- (18) 『千葉県の貝塚』（千葉県文化財保護協会1983）には県内にある約550か所の貝塚の分布調査の結果が記録されている。そのうちの多くは、貝の種類とそのうち主体となるものが示されている。これは貝塚を研究する上で、おそらく他に例のない豊かな情報源である。ところが、貝種の組成を調べようと思うと、これだけある貝塚のなかで、貝サンプルの分析によって数量がわかっているものはとても少ない。筆者は普田高田貝塚の貝サンプルのデータを比較しようと思って千葉市を流れる都川流域の資料をあたって、少なくとも後期では1つも見あたらなかった。この流域には後期の貝塚が20か所ほどあり、そのうち半分以上がいわゆる馬蹄形貝塚である（出口1990、42P）。調査例も少なくないが比較可能なデータはなかなか増えないのが現状である。
- (19) たとえば普田高田貝塚の貝層部分では、落花生や陸稲などの耕作の浅いものを作っている。それによって貝層は保存されている。これは文化財を保存しようという意識からではなく、これ以上耕作土に貝殻が混じってほしくないという考えによるところが大きいという。貝層部分は農具がすぐ駄目になってしまうだけでなく、作物のできがとても悪い。遠くから落花生を見ても貝層の範囲がわかるほどであった。このような理由だけで守られてきた場合、大型の機械導入によって貝層が失われる危険性は極めて高い。農家の方になんらかの方法で理解をもとめる努力が必要である。
- (20) 例えば千葉市有吉南貝塚など。

(2) 後藤1990、26P

引用・参考文献

A. 県内主要貝塚調査の報告

- 太田文雄1988 『余山貝塚確認調査報告書』
部 淳一1989 『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』
出口雅人1990 『千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書』
四柳 隆1991 『小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書』
上守秀明1992 『袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書』
安井健一1993 『野田市東金野井貝塚発掘調査報告書』

B. それ以外の文献

- 岡村道雄1987 「サンプリング法と結果のばらつき」『里浜貝塚V・VI』第I章 動植物遺存体の分析にあたって、10P
岡村道雄1993 「埋蔵文化財保護行政の現状と課題」『全国埋文協会報』No.36、全国埋蔵文化財法人連絡協議会第14回総会における講話要旨
小見川町教育委員会1980 『小見川町埋蔵文化財分布地図』
金子浩昌他1973 「飯富山野貝塚出土の脊椎動物遺存体」『袖ヶ浦町山野貝塚』
金子浩昌1983 「千葉県における貝塚遺跡の分布とその性格」『千葉県の貝塚』
学習院高等科史学部1954 『誉田高田貝塚』
後藤和民1990 「加曾利貝塚の物理探査」関東甲信越静地区埋蔵文化財担当職員共同研修協議会 研修資料、16-30P
小宮 孟・鈴木公雄1977 「貝塚山魚類の体長組成復元における標本採集法の影響について」『第四紀研究』16-2、71-75P
小宮 孟1993 「千葉県山武姥山貝塚の上層堆積物から水洗分離した動物遺存体」『千葉県立中央博物館研究報告 2(2)』45-66P
齐木 勝1973 「千葉県小見川町白井大宮台貝塚」『考古学雑誌』59-1
西村正衛1955 「千葉県香取郡白井雷貝塚（第二次・三次調査）」『学術研究』3
西村正衛1984 『石器時代における利根川流域の研究—貝塚を中心として—』
野田市郷土博物館1981 『東金野井貝塚—限界確認調査概報』
渡辺 新1991 『縄文時代集落の人口構造』I
渡辺 新1994 『多数人骨集積の類例追加と雑感』
千葉県教育委員会 1983 『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』、下の文献と同一
千葉県文化財保護協会1983 『千葉県の貝塚』、上の文献と同一

(上守秀人 財団法人君津郡市文化財センター)

(西野雅人 財団法人千葉県文化財センター千葉調査事務所)